

## 孫と学ぶ学校英語はいかが？

昨年も取り上げましたが、この時期に主張したい大事なことから再び取り上げました。原稿は以前に書いたものを現時点に合わせ、少し訂正加筆したものです。

——学習指導要領の改訂により、2020年から小学校5・6年の英語活動が教科となり、同時に3年から英語活動が始まるといいます。学校では英語のできる教員の確保に奔走する一方で、子どもを塾に送り出す家庭も増えてくるかもしれません。英語学校や塾はお金がかかります。塾の費用を稼ぐために母親はパートに出ている子どもの帰宅時に迎えてあげたり、勉強の面倒を見ている時間もないのが実情でしょう。

そこで提案したいのが祖父母の出番です。教科書の内容は小学校また中学校までのレベルまでだったら、勉強をし直せばなんとか対応できる祖父母も多いのではないのでしょうか。昔とった杵柄で“教える”でなくても“一緒に勉強”でもよいでしょう。

「お爺ちゃん、ここ教えて！」「英語ができるお婆ちゃんなんてスゴイ！」なんて孫から頼りにされたら本当にスゴイ。家庭内での株も上がるかもしれません。

しかも2年後には東京五輪・パラリンピック。来日した外国人と国際交流ができるための外国語の勉強を始めるチャンスにもなります。

私は現在、地元の中学校で英語学習の支援にあたり、また市が運営するシニア向けの英会話教室の講師を務めていますが、このことを受講生の皆さんにもお話ししているところです。受講生は65歳以上の男女ですが、半世紀以上も前に習った文法のおさらいをしながら、「孫の英語の勉強も見てあげられるように頑張りましょう」と呼びかけています。

「教える」なんておこがましければ「孫と学ぶ、または孫と楽しむ学校英語」。自身の脳トレにもなり一挙両得です。もしこれが実現すれば、高額の塾の費用でアップアップしている全国の家庭に、応援の一石を投じることができるかもしれない、なんて期待もあるのです。孫とのスキンシップも深まる。“こんな取り組みが社会に広まっていけばよいのになあ！”と願い期待しているところなのです。

この流れが定着すれば、子ども達の学びと高齢者の生涯学習や生きがいが、部分的ではあっても合致してよい方向に行くような気がするのです。甘い理想論かもしれませんが一つの提案です。以前にもこの欄で取り上げましたが、状況がもっと進んできたため、再びここで取り上げた次第です。

後期高齢者に入り今年喜寿になった私も、誕生月の3月には例年にならってTOEICを受験しました。昨年の4月からは東京都観光ボランティアのスタッフの一員として、新宿駅周辺や都庁の案内とその展望台で外国人支援の活動に参加しているところです。

